

45

世界文学全集

スペードの女王

外 套

はつ恋

赤い花

六号室／可愛い女／桜の園

マカールの夢

どん底

プーシキン／中村白葉訳

ゴゴリ／工藤精一郎訳

ツルゲーネフ／神西 清訳

ガルシン／中村 融訳

チェーホフ／中村白葉訳

コロレンコ／中村 融訳

ゴーリキー／工藤精一郎訳

世界文学全集 45

スベードの女王／外套／はつ恋／赤い花／六号室／

可愛い女／桜の園／マカールの夢／どん底

プーシキン／ゴーゴリ／ツルゲーネフ／ガルシン／

チェーホフ／コロレンコ／ゴーリキー

訳者 中村白葉／工藤精一郎／神西清／中村融

発行／1971年6月30日 7刷／1977年8月15日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)266-5111 振替東京4-808 郵便番号162

印刷所／凸版印刷株式会社 製本所／大進堂製本所

本文用紙／三菱製紙株式会社

製函／文京紙器株式会社

函貼・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／ダイニック株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします Printed in Japan 1971

目次

スベードの女王	3
外 套	35
は つ 恋	75
赤 い 花	161
六 号 室	181
可 愛 い 女	249
桜 の 園	267
マカールの夢	337
ど ん 底	371
人と作品	467

スピードの女王

スピードの女王はひそかなる悪意を示す
(最新占い本)

Пиковая Дама

А. С. Пушкин

1

お天氣のわるい日は

みんな集まり

なんどでも、

倍賭けにして——神よ、ゆるさしめ！——

五十から

百を目あてに。

勝ってはしるす

白墨で。

こうして天氣のわるい日には、

みんなかせぎに

いそしんだ

ある日、近衛騎兵ナルーモフのところでカルタをや

っていた。長い冬の夜もいつのまにか過ぎて、明け方の四時すぎ、一同は夜食の卓を囲んだ。勝った者は、大変な食欲を見せて食ったが、他の者は放心したように、からの皿の前に坐っていた。でも、シャンパンが現われると、話は活気づき、一同がそれに加わった。「君はどうだったね、スーリン」と主人がきいた。

「負けたよ、例の如く。実をいうと、僕は運がわるいんだね——ミランドル（訳注 最初の賭け金を増さないでする勝負）」でやってる時なんか、けっしてあがりはいし、まごつくようなことは断じてないのに、でもやっぱり、いつでも負ける！」

「だが、君は一度も誘惑されなかったじゃないか？一度だってルテ（訳注 特 殊な手）を張らなかったじゃないか？……君の頑固さは僕にとっちゃ驚異だよ」

「それはそうと、ゲルマンは変わってるね！」と客のひとり、若い工兵士官を指さして言った。「生まれながらカルタ札を手にとったこともなきや、カルタの隅を折った（訳注 賭け金を倍にすること）」ことなどてんでないくせして、朝の五時までもじっとわれわれの勝負を見てるんだからなあ」

「僕はとても勝負事が好きなんですよ」とゲルマンは

言った。「だが僕には、余分な金を得ようとして必要
な金を犠牲にする余裕がないのです」

「ゲルマンはドイツ人だ——だから打算的なんだ、そ
れだけのことさ！」とトームスキイが注釈した。「だ
が、だれが不可解だといって、僕のお祖母さんのアン
ナ・フェドトヴナ伯爵夫人、こんなのはほかにない
よ」

「どうして？ どういうんだい？」と客たちは叫ん
だ。

「僕にはどうしてもわからないのさ」とトームスキイ
は続けた。「おばあさんが賭け勝負をしない、そのわ
けがね」

「何も驚くがものはないじゃないか」とナルーモフが
言った。「八十ばあさんが賭け勝負をやらないからつ
て」

「すると君は、あの人のことをちっとも知らないのだ
ね？」

「知らないさ！ まったく、なんにも知らないよ！」

「そうか、じゃ、聴きたまえ！ まず第一に話してお
かなければならぬのは、僕のおばあさんは六十年ばか
り前にパリへ行って、そこで大もてにもてたというこ

とだ。モスクワのヴィナスを見ようというので、みん
ながあの人の後を追っかけ回したというのだからね。

リシュリユー（訳注 フラ
ンスの元帥）さえ夢中になって、あまり

の彼女の情なさ（情なさ）に危くずどんとやるところだったと、
おばあさんは言っている。そのころの貴婦人連はよく

ファラオン（訳注 カルタ
遊びの一種）をやったものだという。ある

時宮中のカルタ会で、彼女はオルレアン公（訳注 ルイ十
五世幼時の摂政）に大変な負けをしてしまった。おばあさんはうち

へ帰ると、顔から貼り黒子をはがし、籐骨入りのスカ
ートをはずしながら、お祖父さんに負けを打ち明け

て、支払いを命じた。死んだおじいさんは、僕の記憶
するかぎりでは、おばあさんの家令みたいな者だっ

た。おじいさんはおばあさんを火のように恐れてい
た。が、その途方もない負けを聞くと、さすがにわれ

を忘れて算盤（そろばん）を持ち出し、二人は半年の間に五十万ル
ーブリつかってしまったの、パリの近郊にはモスクワ

付近やサラトフ県の領地みたいなものはないのだな
どと言って、きれいさっぱり支払いを拒絶してしまっ

た。おばあさんはおじいさんの頬に平手打ちを一つく
れて、立腹のしるしに、一人でさっさと寝てしまった。
翌日になると、おばあさんは、この夫婦生活の罰が相

当きいたろうとあてにして、夫を呼びつけたが、どこい、相手は飽くまで折れなかった。生涯にはじめて、彼女は夫を相手に理屈を並べたり、弁明をしたりした。借金にもいろいろあること、公爵と馬車製造人とは、いっしょにならぬことをとくり話して、夫を説得しようと思ったのだ。ところが、どうして！ おじいさんはすっかり反逆してしまった。どこまでも駄目の一点張り！ おばあさんはついに途方に暮れてしまった。彼女には、非常に有名な人物にひとり別懇の人があった。君たちは、サン・ジェルマン伯のことを聞いたことがあるだろう、いろいろ変わったうわさのあるあの男を。みずから永遠のユダヤ人と名のり、長生薬や錬金石などの発見者をもって任じていたことは君たちも知ってるだろう。世間では山師だと笑っていたが、カザノヴァはその『回想録』の中で実は間諜だったのだと言っている。それはとにかく、サン・ジェルマンは、その神秘性にもかかわらず、なかなか立派な風貌の持ち主で、社交界でもきわめて懇篤な男だったという。おばあさんは今でも夢中にこの人を愛して、うっかり彼について失礼なことでも言おうものなら、腹を立てるくらいなのさ。おばあさんは、サ

ン・ジェルマンならどんな大金でも自由にすることのできるのを知っていた。で、彼に助けを求めることにきめ、使いに書いたものを持たせて、即刻のご来車をと願ってやった。老怪人はまもなくやって来て、ひどくしよげているおばあさんを見た。彼女は真つ黒な絵具で夫の残酷さを描いて見せたあげく、今はすべての望みを彼の友情と親切にかけているのだと言った。サン・ジェルマンは考え込んだ。『そのお金をご用立てすることは、わけありません』と彼は言い出した。『ですが、わたしは、それをわたしにお返しになるまでは、あなたのお心が安まらないだろうと思います。わたしにしても、あなたにまた別の苦勞をおかけするのは本意ではありません。それには、ほかにいい方法があります——もうひと勝負して負けをお取り返しになることです』——『でも、伯爵さま』とおばあさんは答えた。『わたくしどもにはお金がもう少しもないのですもの』——『いや、お金はいりませんのですよ』とサン・ジェルマンは言い返した。『まあ、わたしの話をお聴きください』そこで彼は、おばあさんにひとつの秘密——それを知るためなら、われわれはみなどんな価でも払うだろうと思うような、秘密を語っ

たというわけさ……」

若い賭博者たちは注意を二倍にした。トームスキイはパイプに火をつけて、一服吸ってから、言葉をつづけた――

「その晩おばあさんは、ウェルサイユの *au jeu de la Reine* (訳注 王妃のカルタ会) に顔を出した。オルレアン公が親だった。おばあさんは、借りを払わぬことを軽く詫び、その申しわけにちよっとした作り話をしてから、公に對して張りはじめた。彼女は三枚の札を選び、一枚一枚に賭けていった。と、三枚とも、彼女のソニカ勝ち (訳注 銀行にある金を全部とる勝) になったので、おばあさんは完全に負けを取り戻してしまった」

「そいつあまぐれ勝ち」と、客のひとりが言った。

「お嘶だ！」とゲルマンが断定した。

「札がいかさまじやなかったのかな？」と三人めが引き取って言った。

「僕はそう思わんね」と、トームスキイは重々しく答えた。

「だって変じゃないか！」と、ナルーモフは言った。

「三枚のカルタを立てつづけにあてるおばあさんを持ちながら、君に今日までその秘術がつかめないという

のは？」

「そうさ、残念至極だよ！」とトームスキイは答えた。「おばあさんには息子 息子 が四人あり、僕の父もその一人だが、四人ともやけなカルタ気違いだったのに、おばあさんは誰ひとりにも自分の秘術を授けなかった。

授ければ彼らはもとより、僕にだって、わるからうはずはないのにさ。だが、ひとつここに、伯父のイワン・イリイチ伯が僕に話したことがある、しかもこの話の真实性を、伯父は強調していたがね。死んだチャブリーツキイ、何百万とつかい果たしたあげく、乞食 乞食 のようになって死んだあの男が、昔、若い時分に、

——そうそう、ゾーリチ (訳注 女帝エカテリナ二世晩年の寵臣) にだった

が——三十万ほど負けたことがある。チャブリーツキイは絶望してしまった。おばあさんは、若い連中のいたずらにはいつも嚴格だったが、どうしてか、このチャブリーツキイには憐憫 憐憫 の情を動かしたんだね。そうして彼に、一枚一枚賭けるようにと、三枚の札を教えたというのだ。尤も、今後もう二度とカルタは手にとらないという約束の上でだがね。チャブリーツキイは早速相手の家へゆき、ふたりは勝負の卓に坐った。チャブリーツキイは最初の札に五万ルーブリ賭けて、ソ

ニカ勝ちをとり、あとは倍賭けと張って、とうとう負けを返した上、結局勝ちになったというのだ……」
「だが、もう寝なくちゃ。六時十五分前だぜ」
実際、もう白みかかっていた。青年たちはめいめいのコップを乾して、別れ去った。

2

——Il paraît que monsieur est
décidément pour les suivantes.

——Que voulez-vous, madame?
Elles sont plus fraîches.

——どうやらあなたは腰元たちがお気に入り
のようですな。

——いや、奥様、だってあれらの方が
みずみずしておりますもの。

(社交会話編)

老齡の伯爵夫人***は、自分の化粧室の鏡の前に
坐っていた。三人の侍女が彼女を取り巻いていた。ひ
とりは臙脂の壺を、ひとりは髪針の小箱を、いまひと

りは、火のような色のリボンをかけた高い帽子をささ
げていた。伯爵夫人は、とうの昔に萎え凋んだ容色に
はいささかの未練も持たなかったが、若いころの習慣
は飽くまで守って、七十年代の流行を墨守し、六十年
前と少しも変わらず長い時間をかけて丹念に身じまい
をするのだった。小さい窓の傍には、夫人の養い子で
ある令嬢が、刺繡台の前に坐っていた。

「機嫌よう、Grand'maman(祖母様)」こう言いな
がら、ひとりの若い将校がはいって来た。「Bonjour,
mademoiselle Lise. (モアゼル・リース)」グラン・ママ
ン、僕、お願いがあつてまいりました」

「なんですか、ポール？」

「ひとり友だちをご紹介して、金曜日の舞踏会によん
でやっていただきたいのです」

「じゃ、じかに舞踏会へお連れなさいよ、わたしはそ
の時にお目にかかるから。昨夜は***のところだつ
たの？」

「そうですとも！ とても愉快でしたよ。五時までも
踊りましたよ。エレーツカヤ夫人の美しかったこ
と！」

「まあ、お前ったら！ あのひとのどこがそんなによ

かったのさ？ あの人のおばあ様のダーリヤ・ペトローヴァ公爵夫人ときたら、とてもとても、あの人分段じゃありませんでしたよ！……でも、なんだろうね、ダーリヤ・ペトローヴァ公爵夫人も、さぞお年をめしたことだろうね？」

「なんです、お年をめしたですって？」と、トームスキイはうっかりして答えた。「もう亡くなってから七年にもなるじゃありませんか」

令嬢が顔をあげて、青年に目くばせした。彼は、老夫人には同年配者の死を隠すことになっていたのを思い出し、唇をかんだ。しかし伯爵夫人は、きわめて淡々たる様子で、この、彼女にとっての新しい消息を聞いた。

「亡くなったって！」と彼女は言った。「わたしはちっとも知りませんでしたよ。わたしたちはいっしょに女官にあがってね。拝謁を賜わった時、女帝さまは……」

そして伯爵夫人は、孫に、百遍めの同じ昔話を話して聞かせた。

「さあ、ポール」と、そのあとで彼女は言った。「あたしを立たせておくれ。リーザニカ、わたしの煙草い

れはどこかしら？」

そして伯爵夫人は、自分の身じまいを終わるために、侍女たちをつれて衝立のかけにかくれた。トームスキイは令嬢とふたりきりになった。

「どなたをご紹介遊ばそうとうんですの？」とリザヴェータ・イワノヴァが小声で訊いた。

「ナルームフです。あなたはご存じですか？」

「いいえ！ そのかた軍人、それとも文官ですか？」

「軍人です」

「工兵士官？」

「いや！ 騎兵です。だが、なんだってあなたは、工兵だなんて思っただんです？」

令嬢は笑い出して、一言も答えなかった。

「ポール！」と伯爵夫人が、衝立のかけから呼びだした。「わたしにね、何か新しい小説を届けておくれな、ただ当節のものでないのを頼みますよ」

「とおっしゃると、おばあさま？」

「つまりね、親を踏みつけにするような人間や、土左衛門なんかの出でこない小説のことなのさ。あたしは水死人はともきらいなんでね」

「そんな小説は今ではありませんよ。いっそロシアの

小説は如何いかです？」

「おや、ロシアの小説なんてものがあるの？……そんならそれをよこしておくれ、早くよこしておくれ！」

「じゃ、これで、おばあさま——僕ちよつと急ぎますから……さよなら、リザヴェータ・イワーノヴナ！
いったいどうしてあなたは、ナル・モフを工兵だなんて思ったんでしょうね？」

こう言いながら、トームスキイは化粧室を出て行った。

リザヴェータ・イワーノヴナはひとりになった。彼女は仕事をおしやうて、窓を眺ながめはじめた。まもなく、往來の片側かたがはに、角かどの家のかげから、若い士官が姿を現わした。紅くれないが彼女の頬ほおを蔽おほった。彼女はふたたび仕事にかかり、布地の上へ頭を伏せた。この時、すっかり身じまいをした伯爵夫人がはいって来た。

「リーザニカや、馬車を支度させておくれ」と彼女は言った。「散歩に行きましよう」

リーザニカは、刺繡台の前から立ち上がって、仕事を片づけはじめた。

「まあ、何をのろくさしてるの！ 聞こえないの？」と、伯爵夫人は叫び出した。「早く馬車を支度おさせ

つていうのに」

「只今！」と令嬢は静かに答えて、玄関の方へ駆け去った。

召使がはいって来て、公爵パーヴェル・アレクサーンドロヴィチからの本を夫人に捧ささげた。

「いいよ！ 有難うと言っておくれ」と伯爵夫人は言った。「リーザニカ、リーザニカ、まあどこへ駆け出すんだねえ？」

「着替えをしまして」

「まだ大丈夫、間に合いますよ。それより、ここへ掛けて。はじめの一冊をあけて、読んでおきかせ……」

娘は本をとって、二、三行読んだ。

「もっと大きく！」と、伯爵夫人は言った。「お前、どうかおしかえ？ 声が噎かれたとでもいうの？ ちよつと待って……鏡台を少し寄せて、もっと近く……そう！」

リザヴェータ・イワーノヴナはまた二ページ読んだ。伯爵夫人はあくびをした。

「もうたくさん、その本は」と彼女は言った。「なんてつまらない本だろう！ パーヴェル公爵こうかくに返しておやり、有難うといわせてね……それはそうと、馬車は

どうしたの？……」

「お馬車はできております」とリザヴェータ・イワーノヴナは、往來の方を見やって、言った。

「お前まだ着替えしていないじゃないの？」と伯爵夫人は言った。「お前にはいつも待たされるのね。やりきれないよ、ほんとうに！」

リーザは自分の部屋へ駆け出した。二分とたたないうちに、伯爵夫人は力かぎりベルを鳴らしはじめた。三人の侍女が一方の戸口から、侍僕が別の戸口から駆け込んだ。

「どれだけ呼ぶと聞こえるのかね？」と伯爵夫人は彼らに言った。「リザヴェータ・イワーノヴナに言っておくれ、わたしが待っているって」

リザヴェータ・イワーノヴナは、マントを着、帽子をかぶって、はいつて來た。

「やっとできたのね！」と、伯爵夫人は言った。「大層なおめかしだね！ どうしたことなの？……だれか見せる人でもあるのかね？ お天気はどうかしら？ 風があるらしいね？」

「いえ、少しもございません、奥さま！ しごく穏やかでございますよ」と、侍僕が答えた。

「お前がたのいうことはあてになりません！ 風窓をあけてごらん。そうらね、やっぱり風だ！ それも、大層寒い風じゃないの！ 馬ははずして！ リーザニカ、もう出かけるのはおやめですよ——折角のおつくり、だけれど仕方がない」

《ああ、これがあたしの生活か！》とリザヴェータ・イワーノヴナは考えた。

ほんとうに、リザヴェータ・イワーノヴナは不幸な身の上であつた。他人のパンは苦く、他人の階の段は高し、とダンテは言う。身分高き老夫人の哀れな養い子でなくて、だれが従属の苦さを知ろう？ ＊＊＊伯爵夫人は勿論、邪惡な心の持ち主ではなかったが、社会に甘やかされた女の例として、気ままな人だったし、また、若い時代を楽しみつくして今の世に縁遠くなつた老年の人々のご多分に洩れず、吝嗇で、冷たいエゴイズムに陥っていた。彼女は、社交界のあだな催しにはすべて常にかかわりを持ち、舞踏会にも欠かさず顔を出して、厚化粧して古風な装いをした身をいつも片隅に、舞踏室になくてならぬ醜惡な飾り物然と据えていた。乗りつける客たちは、定めの儀式でもあるように、一度は彼女に近づいて、慇懃な挨拶をする

のだったが、そのあとは最早だれひとり、彼女を顧みる者はなかった。夫人は全部の人々を、もうだれの顔も見分けられないままに、厳格な礼儀エチケットを守りながら引見した。夥おびただしい数の召使たちは、彼女の控えの間や女中部屋で脂あぶらぎり白髪を加えつつ、明日をも知れぬ老嫗ろうごの持ち物をわれがちにくすねては、勝手な真似をしていた。リザヴェータ・イワーノヴナはこの家の殉教者であった。お茶を注いで、砂糖の使い方が多いと咎とがめられ、小説を読んで聞かせては、作者の罪や過あやまちを残らず着せられ、夫人の散歩のお供をしては、天氣や舗道に対する責任までを負わされた。給料はきまつていても、ついぞ払って貰ったためしはなく、しかもみんなと同じように、というのはきわめて少数の婦人と同じように、常に身なりを調ととのえていることが要求された。社交界に出では、彼女の役割は最もみじめであった。みんな彼女を知っているが、だれひとり顧みる者はなかった。舞踏会で彼女が踊れるのはただ、vis-à-vis（訳注）（「トナリ」）の足りない時だけだし、貴婦人連が彼女の腕をとるのはいつも、衣装を直しに化粧室へいく必要のある時に、かぎられていた。彼女は自尊心が強く、自分の境遇を痛感していたので、いつも切ない思

いで救いの手を待ちわびながら、周囲に気を配っていた。が、軽薄な虚栄心のみ強い打算的な若者たちは、彼らがつきまとう冷ややかで権高けんたかな花嫁候補者たちに比べて、リザヴェータ・イワーノヴナの方が百倍も可憐かれんだったのに、一顧も与えようとはしなかった。彼女は、華やかではあるが佻ひねしい客間をそつと抜け出し、貧しい自分の部屋へ、銅燭台の牛蠟ぎゅうろうの、壁紙をはった衝立や用筆筒ようひつづ、さては鏡台、塗りの寝床などを仄暗く照らすあたりへ、泣きにいったことも幾度だったか。

ある日——それは、この物語の初めに書かれた晩から二日後、いま私たちが足をとめている場面にさきだつ一週間のことであった——ある日、リザヴェータ・イワーノヴナが小窓際の刺繡台に向かっているうち、ふと往来に目をやると、ひとりの若い工兵士官がじつと立って、彼女の小窓へ目を凝こらしている姿が、見えた。彼女は面を伏せて、ふたたび仕事にかかったが、五分ばかりしてまた見ると、——若い士官はなお同じ場所に立っていた。通りがかりの士官に媚こびを送るようなことには慣れないので、彼女はそれきり往来を見るのはやめて、二時間ばかりは面も上げずに縫いつづけた。食事の知らせがあった。彼女は立って、刺繡台を片づ

けはじめたが、何気なく往来の方へ目をやると、またあの士官の姿が見えた。これは彼女にとって、かなり奇妙なことであった。午食後、彼女は、ある不安を胸に抱いて小窓のわきへ立ち寄ったが、もはや士官の姿はなかった——そのまま彼のことは忘れてしまった……

二日ばかり後、伯爵夫人と馬車に乘ろうとして、彼女はまたしても彼を見かけた。彼は、海狸の襟に面を隠しながら、車寄せのすぐそばに立っていて、その黒い目は、帽子の下からきらきらと光っていた。リザヴェータ・イワーノヴナは、何を恐れるともなくぎよつとして、言い知れぬ戦きを覚えて馬車に乗った。

家へ帰ると、彼女はさっそく小窓のそばへ馳せ寄った——士官は前のところに立ったまま、彼女の方を見上げていた。彼女は、好奇心に悩まされ、初めて覚える感情に胸おどらせつつ、窓をはなれた。

その時以来、この青年の姿がきまった時刻にこの家の窓下へ現われぬ日はなかった。彼と彼女との間には、それとは言わぬ交渉が成り立った。いつもの場所に坐って仕事をしながら、彼女は彼の接近を感じ——面を上げては彼の方を見るのだったが、その時間が日ましに長くなるのだった。青年はそれに対して、彼女

に感謝の心を抱くかに思われた——彼女は、若い女の目敏さで、ふたりの瞳が会うたびに、青白い彼の頬にさっと紅いのさすのを見逃さなかった。一週間後には、彼女は彼に微笑みかけるようにさえた……

トームスキイが来て伯爵夫人に友人を紹介する許しを乞うた時、哀れな娘の心臓は早鐘をついた。が、ナルーモフが工兵でなく近衛騎兵だと知ると、彼女は、軽々しい質問をして軽薄なトームスキイに心の秘密を洩らしてしまったことを悔いた。

ゲルマンは、ロシアに帰化したドイツ人の子で、父は彼に僅かながら遺産を残していた。ゲルマンは、一身の独立不羈こそ人生の最大事と信じていたので、利子の収入などは眼中におかず、俸給だけで暮らしを立てて、いささかの気儘をも自分に許さなかった。とはいえ彼は、容易に人と打ち解けぬ、しかも自尊心の強い人間だったので、その過度な儉約を嗤うような機会はめったに朋輩にも与えなかった。彼は激しい情熱と火のような空想を持っていたが、意志の強さによって、若さにつきものの迷いからも救われていた。たとえば、心底賭博好きでありながら、かつて一度もカルタ札を手にとらなかったのは、『余分な金を得ようとし